

小学校国語教科書教材「かぐやひめ」採録の変遷

Changes in the Inclusion of the Story of Kaguyahime in Japanese-Language
Educational Materials for Primary Schools

中嶋真弓 (Mayumi NAKASHIMA)

Kaguyahime, the Shining Princess (also known as Taketori Monogatari, the Tale of the Bamboo Cutter) is a standard teaching aid used to introduce the classics in junior high school. As one reason for including Kaguyahime in educational materials, one can mention that Japanese children read and become familiar with it from childhood. Through a comparison with period picture books, this essay will present an analysis and discussion of changes in the inclusion in educational materials of Kaguyahime, which appeared in textbooks from the prewar through the postwar periods, and of the story's value as a teaching aid.

1. はじめに

中学校古典学習導入の定番教材として採録されているのが、「竹取物語」である。採録される要因の一つに、誰もが幼い時に一度は聞いたり読んだりしたことがある「かぐやひめ」の物語との関わりがあるものと思われる。「竹取物語」は、「かぐやひめ」によって、多くの者が幼い時から親しみ誰もが大筋の内容を知っている作品ということから、抵抗なく古典学習に入ることができる教材として採録されていると考えられる。

「かぐやひめ」は、現行小学校国語教科書には採録されていないが、国定国語教科書や昭和20年代の教科書には見られる。平成23年度から全面实施となる新学習指導要領によれば、小学校への古典学習導入が打ち出され、「伝統的な言語文化」に親しむことが重視されている。中学校で学ぶ「竹取物語」の足場づくりとなる「かぐやひめ」が、教科書教材の中で戦前・戦後にわたり採録されてきたその変遷を見ることは、今後の小中学校9年間の古典教材の在り方や昔話という「伝統的な言語文化」に親しませるための学習活動の在り方への一助になると考える。

そこで、本小論は、「かぐやひめ」が戦前・戦後を通して採録されてきた意図を、教科書教材の変遷及び同時代に出版された絵本との比較を通して考察するものである。

なお、対象とした教科書と絵本は、以下のものである。

〔対象とした教科書〕：国定国語教科書第1期から第6期のものと、昭和28年までに発行された〈表1〉に記した低学年教科書である。昭和28年発行までとしたのは、戦後出された昭和22年・26年『学習指導要領国語科編（試案）』に関わっている検定教科書までの変遷を見るためである。

〔対象とした絵本〕：昭和28年までに出版された絵本で、国際子ども図書館に所蔵されている

〔表2〕に記した(a)から(x)までの24冊。

発行者	昭和8	16	21	22	23	24	25	26	27	28
[国定4]	小学国語教科書巻四									
[国定5]		よみかた四								
[暫定]			よみかた3-2							
[国定6]			こくご3			→				
[日書]							218	→	250	→
[大書]								230	→	299
[学図]									241	277
[教出]									253	→
[教出]										281

No.	発行年	書名	文	絵	発行者	備考
(a)	1926	竹取物語	田中耕耘			
(b)	1926	竹取物語	久米舷一			
(c)	1927	かぐや姫	巖谷小波		金星社	小波模範童話5
(d)	1927	竹取物語 外2編	日本童話研究会			
(e)	1928	竹取物語、今昔物語、謡	和田万吉			
(f)	1932	かぐや姫	鈴木三重吉		春陽堂	少年文庫29
(g)	1937	竹取物語	久米元一			
(h)	1947	かぐや姫	鈴木三重吉		光文社	少年文庫
(i)	1947	カグヤ姫	尾關岩二	琴塚英一	昭和出版	
(j)	1948	かぐやひめ: 1・2年読本		堀文子	小学館	なかよし文庫
(k)	1950	かぐや姫: 竹取物語	西条八十	織田観潮	講談社	講談社の絵本21
(l)	1950	かぐや姫: 竹取物語	西条八十	織田観潮	大日本雄弁講談社	講談社の絵本 第2期 21
(m)	1951	かぐや姫: 日本童話	村岡花子	三谷一馬	潮文閣	世界童話文庫12
(n)	1951	かぐや姫: 日本童話	中里恒子	初山滋	三十書房	新児童文庫22
(o)	1951	かぐや姫	中村裕		泰光堂	
(p)	1951	かぐや姫 静山画資料 日本古典	中村小坡	山口将吉郎	日本画劇	
(q)	1951	竹取ものがたり	吉田絃二郎			
(r)	1952	かぐや姫	三木一楽		東京漫画出版社	名作漫画文庫2
(s)	1952	かぐや姫	小川じゅん		国華堂	
(t)	1952	かぐや姫	中村小坡・森比左志	高井貞二	誠文堂新光社	少年少女日本名作選
(u)	1952	竹取物語・落窪物語	成瀬正勝			
(v)	1953	かぐやひめ	松村武雄・鈴木三重吉		あかね書房	日本おとぎ文庫2
(w)	1953	かぐや姫	寺尾知文		集英社	おもしろ漫画文庫15
(x)	1953	竹取物語・落窪物語: 日本古典	北村謙次郎			

2. 教科書教材「かぐやひめ」の特徴

〔1〕採録箇所について

一般的に知られている「かぐやひめ」は、次のような物語である。

- ①おじいさんが、竹の中に小さな女の子を見付ける。
- ②美しく成長したかぐやひめに多くの者が求婚し、特にあきらめきれない五人の貴公子にかぐやひめが難題を出す。
- ③五人の男性の冒険談。そして、その冒険談の嘘が暴かれる。
- ④美しいかぐやひめに帝も興味をもつ。
- ⑤おじいさんとおばあさんに、自分の素性を打ち明ける。
- ⑥おじいさん達は帝に、月へ帰らなくてもよいように頼む。
- ⑦かぐやひめは、天人達の迎えによって昇天する。
- ⑧かぐやひめを失った帝は、一番高い山でかぐやひめからの手紙と不死の薬を焼く。

①から⑧までの内容を一般的なものとした時、教科書教材としてどのような箇所が採録されているかを〈表3の1〉〈表3の2〉に整理してみた。なお、本小論で使用する①⑧の番号は、上記に記した内容を指すものとする。

①から⑧までのストーリー展開から、特に教科書教材として違いが見られた(1)五人の貴公子の求婚について(②③)(2)かぐやひめ昇天後の様子(⑧)の2観点から分析をしていく。

〈表3の1〉教科書教材の内容①～④

発着	採録箇所	①女の子の発見	②育てる	③美人成長	④求婚村坊	⑤の冒険談	石の柱	玉の辻	おじいさん	ゆづり	おじいさん	帝が興味をもつ	おじいさん	おじいさん
[国定4]	1990年3月20日	○	○	○	おじいさん	○	×	×	×	×	×	○	×	×
[国定5]	よみかた24	○	○	○	おじいさん	○	×	×	×	×	×	×	×	×
[暫定]	よみかた24	○	○	○	おじいさん	○	×	×	×	×	×	×	×	×
[国定6]	こころ3	○	○	○	おじいさん	○	×	×	×	×	○	○	○	○
[日書]	218-250	○	○	○	おじいさん	○	○	○	○	○	○	○	×	×
[大書]	230-299	○	○	○	おじいさん	○	○	○	○	○	○	○	×	×
[学図]	241-277	○	○	○	おじいさん	○	×	×	×	×	×	○	×	×
[教出]	253-281	○	○	○	おじいさん	○	×	×	×	×	×	○	○	○

〈表3の2〉教科書教材の内容⑤～⑧

発着	採録箇所	⑤おじいさん	帝が興味をもつ	⑥の冒険談	異教徒の数	天人の人数	両親の須	帝へ	羽衣	帝が興味をもつ	不死の薬	⑧の昇天	おじいさん	
[国定4]	1990年3月20日	○	とどきま	○	おじいさん	×	たごの天人	×	×	×	×	×	○	×
[国定5]	よみかた24	○	とどきま	○	おじいさん	×	大勢の天人	×	×	×	×	×	○	×
[暫定]	よみかた24	○	とどきま	○	おじいさん	×	大勢の天人	×	×	×	×	×	○	×
[国定6]	こころ3	○	みかど	○	たごの天人	×	大勢の天人	着ひた上着	手紙	○	×	○	○	○
[日書]	218-250	○	みかど	○	二人の天人	×	五人の天人	不死の薬	×	○	○	○	○	○
[大書]	230-299	○	みかど	○	二人の天人	×	五人の天人	着ひた上着	手紙	○	×	×	○	×
[学図]	241-277	○	みかど	○	おじいさん	×	大勢の天人	×	×	○	×	×	○	×
[教出]	253-281	○	天子	○	おじいさん	×	おじいさん	着ひた上着	×	○	×	×	○	×

(1) 五人の貴公子の求婚(冒険談)について (②③)

強く求婚する五人の貴公子に対して、かぐやひめは一人一人に難題を投げ掛けるが、その難題に向かって翻弄する場面の採録がなされているのが、[日書 218・250]・[大書 230・299]である。求婚に対し[国定4]では、おじいさんのことばを借りて「じぶんのほんたうの子でないから、私の思ふやうにはなりません。」と言い訳している叙述もある。また、[国定6]は、「あきらめない人が、なんんかのこりました。それで、かぐやひめは、その人たちにとてもむずかしいことをいって、それができたらおよめにいくといいました。けれども、かぐやひめのいうようには、だれもすることができませんでした。」との叙述が見られるものの、実際の冒険談は採録されていない。

文部省『よみかた四 教師用』には、五人の貴公子の求婚について次のように記されている。

随つてこの教材には、児童の教育上頗る不適當であるかの求婚に狂奔した五人の貴公子や朝廷への入内の話などのことは当然省略され得るのであつて、いはば小説竹取物語が原據としたと思はれるかぐや姫伝説に却つて近づくものといふべきである。(＊1)

また、石川之雄は、五人の貴公子の求婚の採録等について次のように述べている。

然し皇子の求婚にも応じなかつたといふことは、教育上穏やかではない。況やかぐや姫の噂を聴召された帝の行幸まで仰ぎながら、遂に叡慮に背いて入内をしなかつたとある説話は、絶対にその登載を避くべきであり、且児童の理解にも遠いと思はれる。(二千人の六衛の司が防ぎ得なかつたとあるのは) これまたわが国体国情に照らして、たうていそのままで児童に授けることはできない。教材の解釈・本編の眼目は、原典の姫をめぐる五人の男たちの求婚失敗譚に中心にあるのを避けて、姫の出生、昇天といふ夢幻的空想を中心にしてゐるので、この物語によって、日本の古い文学の中にこんな美しいロマンチックな話があるという事を示し、現像的な縹渺とした叙情詩味の中に子供の心を遊ばせる事が出来やう。(＊2)

さらに、五人の貴公子の求婚については、高橋宣勝は、次のように述べている。

『竹取物語』は昭和のはじめに使用された国定教科書『小学国語読本』(中略)巻四に「かぐやひめ」として登場したのだが、それがまさしく『竹取物語』の昔話化といえるものであったからだ。この「かぐやひめ」は小学生用に書き直されたものである。それゆえに大幅な簡略化がされているのは当然で、その最も極端なものは五人の求婚者と難題のエピソードである。『竹取物語』のながで一番多くの篇幅を割くそのエピソードが、単に、多くの人がかぐやひめを嫁にと申し込んだということだけで片づけられているのである。しかしそうした簡略化がなされていても、ストーリーは、かぐやひめの竹中の誕生から十五夜の晩の昇天にいたるまで、『竹取物語』を忠実に追っている。(＊3)

これらを見るに、五人の貴公子の求婚場面の採録に対しては、次のように考えられる。1点目は、地位ある者への配慮から。2点目は、子どもの発達段階から見たとき求婚という内容がそぐわないということから。そして、3点目は、子ども達がどこに興味をもって読み進めていくかということからである。

(2)かぐやひめ昇天後の様子 (⑧)

おじいさんやおばあさんの願いも虚しくかぐやひめは昇天するのであるが、昇天場面で終わっているものと、帝がかぐやひめからの手紙あるいは不死の薬を燃やす場面まで続いているものとの2つに分かれる。⑧の場面があるものは、[国定6]・[日書218・250]である。

かぐやひめを失った帝の辛い気持ち、富士山の由来等々この場面から子ども達が得る内容は多くあるが、[日書218・250]のように、五人の求婚場面も採録している事から考えると、一般的な内容に沿う形で採録することを重視したものと思われる。また、求婚の内容にわずかに触れた[国定6]は、帝の優しい思いをこの場面で伝えたかったのかも知れない。

〔2〕叙述について

叙述について、4観点から見ていくこととする。

(1)かぐやひめと帝の関わり

「帝とかぐやひめの関わり」では、「(a)かぐやひめに対する帝の思い (b)帝とおじいさんの関係 (c)帝とかぐやひめの出会い」の3点で見ていく。

(a)かぐやひめに対する帝の思い

[国定5][暫定]以外、全ての教科書が、美しいかぐやひめの噂を聞いた帝が、何とかしてかぐやひめに会ってみたいと思う。[国定4]では、「とのさまから、おく方にしたいとおことばもありましたが」とある。これが後述する「(b)帝とおじいさんの関係」「(c)帝とかぐやひめの出会い」につながる教科書教材もある。[国定5][暫定]にはかぐやひめに対する帝の様子等が記されていないが、そのような意味からも、[国定5][暫定]は、「昇天するかぐやひめ」といった、ストーリーのシンプルさや美しいお話としてまとめ上げようとする傾向があるように思われる。先の五人の貴公子の叙述に関してもそうであるが、帝という高い地位の方の在り方として一般の女性との関わりについて避けるべきという配慮があったのかも知れない。雨海博洋は、かぐやひめの帝に対する思いについて次のように述べている。

五人の貴公子の求婚を難題によって切り抜けたかぐや姫の前に、最高の権威者帝が立ち
はだかった。帝の権威に反発しつつも、帝の人柄・優しさには、変化の人というより人間の
的に心ひかれ、かぐや姫は付き世界の人と地上の人間としての両面をたゆたい、心を痛め
た。(＊4)

(b)帝とおじいさんの関係

かぐやひめが宮中に来るならば、おじいさんに位を授けるという取引を行う叙述が[国定6]・[教出253・281]に見られる。五人の貴公子達同様人間の本来の姿がここにも見られる。

(c)かぐやひめと帝の出会い

かぐやひめと帝が出会う場面を採録しているのが[国定6]・[教出253・281]である。そこでは、以下のような叙述がなされている。内容的に同様のために、[国定6]の叙述を載せておく。

・[国定6]: すぐごしょにつれてかえろうとなさいました。すると、かぐやひめのすがたがきゆうにみえなくなりました。(中略) みかどは、「これはただのにんげんでは

あるまい。」とお思いになって、

かぐやひめの不思議な力が見られる場面である。子ども達にとっても、「やはり、月の人なんだ。」「消えることができるなんて、かぐやひめはすごい。」など、色々な想像をめぐらすことができる場面である。(a)(b)での、人間の欲望に満ちた叙述部分から、ふっと現実離れた夢の世界に引き込んでいく効果があると言える。

そして、いよいよかぐやひめの素性を明らかにする場面につながるとなれば、よりこの叙述は、強烈なイメージとなって子ども達に受け取られるのではないだろうか。

(2)羽衣を着た時のかぐやひめの様子・昇天の様子

〔国定4〕〔国定5〕〔暫定〕以外の教科書に「羽衣」は登場する。「羽衣」及び昇天の叙述を見ると以下のようである。

- ・〔国定4〕〔国定5〕〔暫定〕：天人の用意して来た車に乗りました。
- ・〔国定6〕：天人がはごろもをきせようとする、かぐやひめは、「もうすこしおまちください。」(中略)かぐやひめにはごろもをきせました。かぐやひめのすがたは、それはうつくしくかがやきました。そこで、よういの車にのって、しずかに天へのぼっていきました。
- ・〔日書218・250〕：はごろもをきると、かぐやひめはもうてんにんになってしまいました。
(波線筆者)

・〔大書230・299〕：天人がいそいではごろもをきせると、かぐやひめは空をとぶ車にのりました。

・〔学図241・277〕：かぐやひめは、月の国のきものにきかえました。月のひかりは、またいちだんと明るくなりました。かぐやひめをのせた車は、しずかに天へのぼっていきました。

〔教出253・281〕：天人は、いそいで、かぐやひめにはごろもをきせました。かぐやひめのすがたは、いままでよりもいっそう美しく光りかがやきました。そうして、むかえの車にのって、しずかに天へのぼっていきました。

教科書教材には、「羽衣」がどのようなものかの説明はなされていない。ただ、天人が持ってきたものというだけである。唯一「羽衣」の意味が見られるのは、〔日書218・250〕で、「はごろもをきると、かぐやひめはもうてんにんになってしまいました。」とあるように、これを着ることによって下界の人でなくなったことを示している。

昇天場面子ども達は、「かぐやひめは、羽衣を着て月の世界に帰って行った。」「迎えの車って空を飛ぶ不思議な乗物なんだ。」と色々な面から想像をふくらませてくるであろう。そして、さらに、「羽衣」がどのようなものか、昇天するかぐやひめの表情や様子を想像させることも楽しい読みにつながっていくことであろう。

〔国定6〕〔学図241・277〕〔教出253・281〕のように「もうすこしおまちください。」や「(はごろもをきせました。)かぐやひめのすがたは、いままでよりもいっそう美しく光りかがやきました。」というように、「羽衣」に何かありそうなどちらとも判断がつかない叙述も見られる

ことを付記しておく。

(3) 帝の呼び方

〈表3の2〉から分かるように、「御門(みかど)」の呼び方には、「みかど」・「とのさま」〔国定4〕〔国定5〕〔暫定〕・「天子」〔教出253・281〕の3つがある。

ほとんどの教材が、原文同様「御門」(みかど)としている。「とのさま」の表記について、規工川佑輔は、次のように述べている。

戦前戦後を通じ、古典教育ほど消長の激しい国語教育の分野はなかった。今回重視されるに至ったゆえんは新しい時代の要求から生まれたもので、復古調に乗ったものではないはずだ。戦前の国定サクラ読本尋常二年生「かぐやひめ」で、原作に御門(みかど)として登場してくる人物が「とのさま」となっていた例がある。古典教材や教育がゆがめられてはたいへんだ。(＊5)

(4) 数字の記載

教科書教材に出てくる、数字について見ていく。

(a) かぐやひめの様子に変化があらわれる時期

かぐやひめは、十五夜が近づくにつれて悲しい表情になり泣く場面が見られるが、その時期について次のような叙述が見られる。

- ・〔国定4〕〔国定5〕〔暫定〕：かうしてゐる間に、何年かたちました。
- ・〔国定6〕〔大書230・299〕〔教出253・281〕：ある年の春のころから、
- ・〔日書218・250〕：それから、三年立ちました。春のころから

＊「それから」の前には、帝がかぐやひめに会いたいと思い、使いの者がかぐやひめのもとに行かせるのであるが、かぐやひめが会わなかった内容が記されている。

- ・〔学図241・277〕：かぐやひめが竹の中から生まれて、三年たちました。ところが、その年の春のころ

かぐやひめが地上に来てからの年月であるが、〔学図〕のようにストレートに提示しているものと〔日書〕のようにある時点から三年という具合に提示しているものと、同じ三年ではあるがそこに誤差が見られる。また、「ある年」というように漠然と提示しているものも見られる。かぐやひめが「三月ほど」で普通の人の大きさに成長したことは全ての教科書教材に見られるが、大まかではあるが、この三年という年月によって地上にどれだけ滞在していたかが分かり、児童達にとっても興味深いのではないだろうか。

(b) 兵士の数と天人の数

- ・〔日書218・250〕〔大書230・299〕 兵士の数二千人・天人の数百人

兵士・天人の数を原文のように数値であげているものが、〔日書〕〔大書〕である。このような数字があることによって、かぐやひめの成長の不思議さ、地上での生活の月日の予想、そして、例えば兵士であれば、二千人もの人がいても月の人になわなかった、あるいは、百人の月の人達がいる様子はどのようなものか等々、子ども達にとって色々想像することができるであろう。ファンタジーの世界ではあるが、よりイメージ豊かに読むためにこれらの数字は、子

ども達にとってはより臨場感溢れるものとなってくるのかも知れない。しかし、これらの数字を採録した教科書教材が少数であることは、前述した石川之雄が述べているように「(二千人の六衛の司が防ぎ得なかったとあるのは) これまたわが国体国情に照らして、たうていそのまま児童に授けることはできない。」と言う考えからなのかもしれない。

〔3〕「学習の手引き」について

教科書教材にある「学習の手引き」を〈表4〉に整理した。

学習の手引きにあるように、多くの場合が、「紙芝居」にするという学習活動に結び付けられている。藤富康子は、このような活動について次のように述べている。(＊6)

満6歳以上を児童期として、幼児期と区別するが、まだ多分に幼児期的傾向が残っており、感受性主体の生活である。即ち遊戯生活が中心で、大人の生活の模倣である模倣遊戯、ものを作って遊ぶ作業遊戯、この2種の遊戯が結合すると、児童劇の型を見せる。活発な行動を伴うため声が大きく、主観的感情に終始するために完了の言語が基礎となる。感情移入が容易で擬人法に馴染みやすく、空想や幻想、超自然現象に同化して、童話的世界に流通する。ここから想像力が生まれる。この時期に充分想像力をかきたてる環境を与え、自由に空想世界をたのしませてやると、創作の意欲を持つようになる。

〈表4〉 学習の手引き

発行者	教科書№	単元名	教材名	手引き
[国定4]	小学国語 読本巻四	五 かぐやひめ		
[国定5]	よみかた 四	七 かぐやひめ		
[暫定]	よみかた3-2	二十一 かぐやひめ		
[国定6]	こくご三	十三 かぐやひめ		
[日書]	218・250	5 かぐやひめ		(1)みんなで、かみしほいをつくりましょう。 (2)そのえを、みんなでおなしましょう。
[大書]	230・299	一 月夜のおこわ	(二) 竹とりものがたり	・「竹とりのおきな」を「」のあるところと、ないところにおかれて、ともだちとよんでみましょう。 ・「竹とりものがたり」をよんでおもしろかったこと、美しかったことを話しましょう。このお話をかみしほいにしてごらんください。
[学図]	241・277	九 かぐやひめ		1はなしをするように、じょうずによむお話をしましょう。 2でわけをして、かみしほいを作ってみましょう。かみしほいの作りかたを、先生におしえていただきます。
[教出]	253・281	四 お話	かぐやひめ	

3. 絵本との比較

本章では、〈表2〉に提示した絵本を中心に、教科書教材との違いについて述べていく。

先ず、採録箇所についてであるが、24冊の絵本のストーリー展開を見ていくと、①から⑧までの内容を網羅している絵本は全体の75%である。また、五人の貴公子の求婚は92%の絵本で描かれており、触れていない絵本は(i) (三人の冒険談には触れている。) (p)の2冊のみであ

る。つまり、発行された絵本のほとんどが一般的に伝えられている「竹取物語」の展開を採用している。言い換えるならば、多くの子ども達は、「かぐやひめ」を一般的なストーリー①から⑧で受けてとめていると言える。内容が少し他と違うものとしては、以下のものが挙げられる。

(x) : (五人の求婚の叙述の後に)「あれは、人間のたねではない。神か仏が、かりにすがたをあらわしたもののゆえ、うっかりちかよれば、命があぶない。」

(o) : 「兎が怪我をした時に薬を付けてもらったおじいさんへのお礼として竹藪に案内する」

(o)(s) : かぐやひめがとのさま(天子様)とあった時に不思議な力を発揮する。例えば、多くの鳥を自分の側に集める等(筆者補 : (o)・(s)は、マンガである。)

次に、多くの絵本に描かれているが、教科書教材には全く記されていない内容について触れていきたい。

絵本の多くにはあり、教科書教材には見られない内容として、以下のものが挙げられる。

◆かぐやひめの命名

教科書では、「おじいさんが名付けた」とあるものと「誰が名付けたかは曖昧」なものがある。絵本の中にも「おじいさんとおばあさんが名付けた」という叙述はあるが、以下のように名前・職業等を挙げているものもある。

- ・三室戸の斉部秋田 : (c)・(u)・(t)・(a)・(k)・(q) ・斉部秋田 : (x)・(b)
- ・斉部という人 : (w) ・学者 : (m)・(n)・(o) ・偉い人 : (v)・(f)・(h)・(l)
- ・名付け親を頼んで : (e)

◆かぐやひめ以外の呼び方(漢字も含めて)

教科書教材では、「かぐやひめ」以外の言い方は登場しないが、絵本では以下のような表記がなされているものがある。

- ・輝夜姫 : (f) ・なよたけのかぐや姫 : (n)・(w)・(q)・(u)・(b)・(g) ・赫映姫 : (x)
- ・弱竹の赫夜姫 : (a) ・嬬竹の赫映姫 : (e)

◆かぐやひめの強情な様子

かぐやひめの美しさに惹かれる帝が、おじいさんやおばあさんにかぐやひめに会うことができるように頼むが、絵本では帝という高い地位の方に会わないかぐやひめのことをおじいさんやおばあさんのことばを借りて次のように表現している。

- ・強情(剛情) : (c)・(r)・(u)・(b)・(g)
- ・聞きわけのない、分からずや : (f)・(v)・(h)
- ・心の強い、かたい子 : (t) ・いじっぱりで、気が強い : (q)

◆「不死の薬」と「羽衣」が意図する事柄 ～天人の言葉と羽衣を着たかぐやひめ～

教科書教材で天人が言葉を発する叙述があるのは、天人に連れて行かれまいと隠れているかぐやひめに対して[日書 218・250]「さあ、かぐやひめ、早くおいで。」、[大書 230・299]「かぐやひめ、早くおいで。」のみである。また、「羽衣」のもつ不思議な力について教科書教材でその叙述が見られることについては前述した。しかし、絵本では、天人が地上について次のよ

うに述べる場面、そして、「羽衣」を着たかぐやひめの様子について次のような叙述が見られる。そこに、「不死の薬」「羽衣」の役割が位置付けられている。

- ・「永い間いやな人間の世界にいらしたから、定めしお心地がわるいでせう」「かぐや姫は、不死の薬を一寸なめて、それを天子様のお使いに渡しました。ところがどうでせう。不死の薬を飲んで羽衣を着たかぐや姫は、全く別人のやうになって、もう人間世界のことをすっかり忘れてしまいました。悠々と天へ昇ってしまひました。」：(c)
- ・「こんなきたならしいところにいつまでゐるのです」「この薬を少しお上がりなさい。こんなきたならしいところにいらしたので、さぞお心持が悪いでせう」：(f)・(h)
- ・「おちいさんのこともお婆さんのことも、帝のことも、今迄悲しかったこともみんな忘れて、空を飛ぶ車に乗り」：(f)
- ・「このおくすりを召しあがって人間の世界のいろいろのくろうをおわすれになってくださいませ。きっと、すぐころがうきうきして、人間界からはなれたおこころもとになれますでしょう。」：(n)
- ・「穢い下界にいつまでもゐないで早くおかへりなさい」：(d)
- ・「いざ、かぐや姫、地上はけがれたところで」「この薬をめしてこの世のけがれを去り、羽衣をまとうと、この世の思いを忘れたように」：(x)
- ・「けがれたものをめしあがったから、さだめし御心地が悪かろうから」：(u)
- ・「何時まで穢らはしい所においでなのですか」「このお薬を召し上がりますやう。永い間、下界の穢らはしい物を召上つて、どんなにか御気持が悪かつた事でせう」：(b)・(g)
- ・「こんなきたないところにいつまでいても、しかたがありませんよ。」「姫に壺の薬をさしあげよ。この賤しい地上のものをお食べになったゆえに、さぞかし、お心持も悪かろう」：(t)
- ・「こんな穢い下界に、どうしていつまでもゐられませう」「永い間、穢れた世界のものを召し上がりましたから、お心持ちがわるうございませう」：(a)
- ・「こんなきたないところにゐるものではありません」：(e)
- ・「下界からにげておいでなさい」「きたない人間の世界のものをおたべになられたからおきもちがわるいでしよう。」：(q)

また、かぐやひめ自らが「羽衣」について、次のように語っている絵本もある。

- ・「羽衣を着てしまうと、人間としてのあたたかいこころもちがなくなる。。。」：(n)
- ・「その衣を着てしまうと、心が変わってしまふと」：(b)・(g)

このように、下界を「賤しく」「穢い場所」として描いていることが分かる。そして、そこでの心地悪さを「不死の薬」をなめることによって戻そうとするのである。また、「羽衣」については、それを着ることによって下界との別離、そしてそれは人間の感情をもたない天人に戻ることを意味し、その位置付けが明確になされているのである。

つまり、下界は「賤しく」「穢い場所」として位置付けられ、そこで過ごしたかぐやひめが、天人としての生活に戻るための装置として「不死の薬」があり「羽衣」があるのである。絵本

には、それが明確に記されているのである。

◆かぐやひめが下界に来た理由

教科書教材には、「何故かぐやひめが下界に来たのか」そして、「何故おじいさんとおばあさんのもとに来たか」について全く触れていない。また、教科書教材では、自分の素性を話す場面においても、ただ、「月の者」というのみである。

それに対して、絵本ではその両者の疑問に応えている。

◇かぐやひめ自身の説明

- ・「大空の月の都に生まれた天女、あるいんねんで」：(h)
- ・「月の都の人 むかしのいんねんがあつて」：(r)
- ・「月の世界のもの 月の世界に生まれる前、ある因縁で」：(d)
- ・「わたくしの生まれが、この世のものでないことは、翁もごぞんじのはずです。でも、わたくしの前世が、月の都の者であることは、まだごぞんじなかたでしょう。」：(x)
- ・「月の都のもの 前世の約束事がありましたために、この人間の世界に出て参ったのでございます」：(u)
- ・「月の世界の者、それがふとした事から假りに人の姿となつて」：(b)・(g)
- ・「月の世界のもの 前世の因縁によって、この世につかわされたもの」：(t)
- ・「月の都の人、月の世界へ生まれる前の因縁で」：(a)
- ・「ツキノミヤコニウマレタテンニョ・・ワケガアリシバラクニンゲンノスムコノセカイニ」
：(l)
- ・「よその世界で生まれましたもので、月に生まれました天女。あるいんねんで」：(h)
- ・「月の都のもの、因縁があつて」：(f)

◇天人の説明 (①かぐやひめが下界に来た理由 ②おじいさんの家に来た理由)

①かぐやひめが下界に来た理由

- ・「大空の月の都に生まれた天女。或いんねんで、しばらくの間、この世界へ」：(f)
- ・「ひめはすこしばかりあやまちがあつたのでにげんの世界におろされていた」：(v)
- ・「わけがあつて、月の世界へ、おくことができなかつたかぐや姫を」：(m)
- ・「かぐや姫はある罪をおかしたので、少しのあいだ、お前のようないやしいものところへ・・」：(h)
- ・「もともと、かぐや姫は、月の都で罪をうけて、人間のすがたになつて」：(n)
- ・「罪をつくられて下界へ」：(d)
- ・「罪をつくりたまへければ、かく賤しきおのれがもと・・」：(x)
- ・「天上で罪をおかされたことがあつたため、このように卑しいお前のもとに」：(u)
- ・「かぐや姫はある罪によって、お前のような賤しいものところに」：(t)
- ・「つみをつくられたので、かように賤しいその方の許へ」：(a)
- ・「姫の罪も消えたので」：(e)
- ・「ひめは、月のみやこで、つみをつくられたので・・」：(q)

②おじいさんの家に来た理由

- ・「おじいさん、あなたは正じきない人なので、そのごほうびにしばらくのあいだかぐやひめをあなたにあずけることにしたのです。」：(v)
- ・「おじいさんが、この世には、めずらしい、りっぱなしょうじきな人なので、」：(m)
- ・「わたしたちはお前さんがあんまりしょうじきな、いい人なので、そのほうびに、ちよつとのあいだ、かぐや姫をお前のうちへよこしてあげ、」：(h)
- ・「おまえがよいことをしてくらしていたので、そのたすけに、ちよつとのあいだ姫を、人間のすがたにしてつかわしたのだ。」：(n)
- ・「おじいさんにお礼」：(d)
- ・「お前は、日頃から心掛けのよい翁であつた。月の天子はそれを愛でられて、ほんの暫くの間、かぐや姫をお貸し與へになつたのである」：(b)・(g)
- ・「なんち、おさなき人、いささかなる功德を翁つくりけるによりて」：(x)
- ・「お前は、わずかとはいいながら、その昔善根をつんだことがあるから、その功德にめでて姫をお前のたすけにとしばしの間月の世界からくだった」：(u)
- ・「お前は愚かものだな。わずかばかりの功德をつんだ者と見て、お礼にほんのしばらくかぐや姫をおまえの家に下ろしてやったのだが」：(t)
- ・「お前は少しの功德をつくつたから助けてやろうと思って、赫夜姫をしばらくの間といふ約束で」：(a)
- ・「そちは少しばかりの善いことをしたので、それを助けるために」：(e)
- ・「おきなよ、おまえは、よいことをしたむくいに、」：(q)

以上のように、かぐやひめは素性を説明する時に、「月の者」そして、「ある因縁」と多くの絵本で説明している。また、天人によれば、かぐやひめは「罪を犯した」ために下界におろされその罪が消えたために天に戻るとある。さらに、おじいさんの家に来た理由としては、「おじいさんの人柄・功德」に対してかぐやひめを預けたことが分かる。

絵本の特徴について、久保木寿子は、次のように述べている。

「かぐやひめ」の現代の絵本の傾向として「子どものお話—美しく哀しいロマン溢れる物語—として、i（姫の誕生 補筆者）iii（姫昇天 補筆者）は必須の部分である。これに対して、柳田国男のいわゆる説話の〈変化部分・自由区域〉をなすii五人の求婚譚の部分は、しばしば縮小され、時に割愛されている。最後のiv富士の煙は、殆どの絵本がカットである。つまり〈日本人のアイデンティティ〉を担うのは、ひとえにiiiの昇天（前提として来迎がある）場面なのである」と述べている。（*7）

このように教科書教材と絵本を比べると、教科書教材が発達段階に応じて、「美しい物語」「子ども達が想像できる楽しさ」を味わわせようとしていることを感じ取ることができる。（*8）

教科書教材と絵本との比較を通して、教科書教材の採録状況を次のように整理してみた。

①どろどろした世界を避け、美しい物語、ファンタジーの世界に浸ることができるようにする。

- ②登場人物一人一人の優しさを強調し、人間味溢れる存在として描く。
- ③下界に対する天人の言葉は、人間世界への批判・見下した表現であるためにそれを避ける。
- ④羽衣、不死の薬は、かぐやひめと下界を切り離すものという観点から、かぐやひめの非常さがクローズアップされてしまうことを避ける。
- ⑤かぐやひめが下界に下りてきた理由が、「罪」「前世の因縁」という児童にとっては難しい内容であるためにそれを避ける。そして、かぐやひめの美しいイメージを保持する。

4. 教科書教材「かぐやひめ」の教材価値

本章では、教科書教材として「かぐやひめ」が採録されたその意味を論じていく。

文部省『よみかた四 教師用』には、「かぐやひめの教材の趣旨」として、次のように記されている。

わが国物語文学の祖といはれる竹取物語は、美しい童話的な伝説を骨子とし、平安時代人の現実生活によつて具現した小説であるが、本教材は専らその童話的伝説的要素を取上げて、児童の心情に適應する説話としたものである。(中略)この説話の興味は、伝奇的、幻想的なところにある。(p45)

始から終まで幻想的であるとともに、抒情詩のやうな美しい物語である。挿絵も表現に即応して、夢幻的であり、しかも情味豊かにあらわされてゐる。(p48) (*9)

また、同書の「二十五 羽衣」の箇所には、「『うらしま太郎』『早鳥』『かぐやひめ』等とともに、我が国民に広く愛好される伝説である。」(P222)とある。

つまり、初めて国定教科書に登場した「かぐやひめ」は、「伝奇的・幻想的な興味を惹く作品」「国民に広く愛好される伝説」として取り上げられたのである。そして、採録された教科書教材の学びの流れとして粉川宏は、次のように述べている。

「モモタロウ」と共に出発し、「花サカヂヂイ」と一緒に虚空に咲く花を見上げ、蛙に笑い、浦島に呆然とし、かぐや姫に夢をふくらませ、羽衣をまとった天人の舞にうっとりとする(中略)これが当時の小学二生の世界だった。(*10)

さらに、秋田喜三郎は、「かぐやひめ」の特徴について、次のように述べている。

伝説にも空想的想像的要素があるが、史的要素によつて織りなされた国民性に基く物語であるから、童話的興味の上に史的興味が加重せられ、この学年児童の興味によく投ずるものである。(中略)かぐや姫：月の都の美しい天女の伝奇的伝説(*11)

「かぐやひめ」が教科書教材として児童の発達段階にとって、興味深く読まれ、受け入れられやすい作品であると言える。

[学図 241] に対応する教師用指導書には、次のように記されている。

〈単元の目標〉

古典の紹介という意義をもつとともに、長編物語の読解力を養い、物語のすじをとらえて、紙芝居や絵巻物にする能力を養う。

一 趣旨と指導目標

(1)古典教材といってよいものである。「竹取物語」を原拠にして、子どもむきにや

さしくしたものがたりである。こういう伝統的な古典的な童話は、日本のおとなならば、子ども時代には必ず一度は読んだり、聞いたりしているものである。(中略)自分たちと同じ「心のふるさと」をもってくれるというしほがある。これは、おとなの立場からのよろこびである。しかし、それはいいかえると、社会の要求といってもよいのである。子どもたちにしても、兄、姉の読んだり、話したりしているのを、自分自身も今こうして読んだり、話したりできるということは、なつかしく、うれしいことである。古典的、伝統的教材の教育的意義はここににあると思う。

「古典教材」「伝統的な古典的な童話」と位置付け、誰もが必ず読んだ作品であり、これを子ども達を読むことによって大人や兄弟つまり日本人同士同じ作品を共有し結び付きを強める、「古典的、伝統的教材の教育的意義」をここに見出しているのである。言い換えるならば、その媒介にふさわしい教材が「かぐやひめ」というのである。

雨海博洋は、子ども達の興味深く読み進めていける要因を次のように述べている。(＊12)

『竹取物語』では、竹取の翁が「讃岐の造麻呂」、女は「かぐや姫」と登場してくる。しかも名付け親の三室戸齊部の秋田まで配置されて、(中略)具体的に、石作皇子・車持皇子(中略)といった『日本書紀』『続日本紀』等に名声を馳せ、栄誉を讃えられたき貴公子ばかりである。それだけではない。蓬萊の玉の枝を作らされた工匠漢部内麻呂(中略)等端役に至るまで、その役柄にふさわしい名称と史的背景をふまえて登場してくる。このことは『竹取物語』が単なる昔話・説話から離れ、あたかも過去の現実として存在したかのごとき興味と迫力を持って現実世界に対峙する。現実にはありえない古代ロマンの世界とは思いつつも、つつい現実の世界と比べられるという文芸効果をあげている。

以上「かぐやひめ」の教材価値について見てきたのであるが、そこに込められた採録意図を次のように考えた。

- ・伝奇的・幻想的で児童達に豊かに、興味深く読ませることができる。
- ・国民に広く愛好される伝説
- ・童話的興味の上に史的興味が重なる。

そして、子ども達の興味を引きつける教材・音声言語に向かうことができる教材としても採録されたのでないかと考えられる。

つまり、「かぐやひめ」の昇天には、子ども達に驚きとファンタジーを与える楽しみがある。そして、この作品は、子ども達に強い思想を植え付けるような影響力はない。言い換えるならば、軍国主義の教科やより強い愛国心を強制的に植え付けるのではなく、その作品そのものを感得することによって、物語に親しみ、それば日本の文化に触れるきっかけとして採録されたのではないだろうか。異世界・異空間、人間業ではないそんな夢のお話として、「かぐやひめ」は、無難な存在であったのかもしれない。

5. おわりに

誰もが知っている「かぐやひめ」と本小論の中で述べたが、徳田克己の調査(＊13)によれ

ば、「かぐやひめ」を子どもに話したことがある家庭が、1990年には58%であったものが2000年には46%に減っている。2010年の今ではどうだろうか。このように見ていく時、我々大人達も伝統文化の継承者として意識して子ども達に接していく必要があるのではないかと痛感するのである。

《引用文献・参考文献》

- * 1 : 文部省『よみかた四 教師用』文部省 1941.9.11 P45
- * 2 : 石川之雅 『第四期国定教科書「小学校国語読本総合研究」巻四』1937)
 (参考) 鳥山榛名は、中学年の読解力を深めるということで、『小中学校における古典教育』（『国語と国文学』東京大学国語国文学会 vol133No.4 至文堂 1956.4）の中で五人の貴公子の求婚について次のように述べている。
 もう一歩読みを深めて、竹取翁夫妻とかぐや姫、かぐや姫に対する五人の貴公子の対人関係において、児童なりに考えさせる心の動き方の問題がありはしないか。羽衣の天女と漁師との関係においても同様である。こうした問題は直接児童の日常生活には役立たないかもしれないが、学年相当に問題を見出していくことは、直接の目標である読解力を深めるという指導にもなってくる。
- * 3 : 高橋宣勝『語られざるかぐやひめ 昔話と竹取物語』大修館書店 1996.3.20 P160
- * 4 : 雨海博洋『物語文学の史的論考』桜楓社 1991.10.15 p9
- * 5 : 規工川佑輔「関心を深めるための指導法開発を」（『教育科学国語教育』明治図書3月臨時増刊号 1989.3）
- * 6 : 藤富康子『サクラ読本の父 井上尅』勉誠出版 2004.7.10 P163～p167
- * 7 : 久保木寿子「絵本・絵巻と物語表現～『かぐやひめ』の背景～」白梅学園短期大学紀要 40 2004
- * 8 : 3に同書 P172
 かぐやひめは天界で罪を犯したためにこの世に降ろされ、その刑期が満ちたのでまた天へ帰るといふのだ。つまり、かぐやひめがこの世に生まれたのは天界からの（流謫^{るたく}）なのである。かぐやひめの誕生の背後には（流謫）の思想があるのだ。だから国定教科書の「かぐやひめ」、あるいはそれをもとにした昔話は、この流謫に言及しさえすればよかつたのである。そうすればかぐやひめの昇天ははつきりと論理が通る。論理が通れば昔話として定着したかも知れないのだ。それにしても、どうして「かぐやひめ」やその流れを汲む昔話には流謫についての言及がないのだろうか。
- * 9 : 1に同書 p45・p48
- * 10 : 粉川宏『国定教科書』新潮社 1985.10.20 p156
- * 11 : 秋田喜三郎『讀本の體系的研究』晃文社 1938.9.10 p133～134
- * 12 : 雨海博洋『物語文学の史的論考』桜楓社 1991.10.15 p8～p9
- * 13 : 徳田克己「家庭における幼児と童話・昔話とのかかわり～幼児の『童話・昔話離れ現象』を中心に～」（日本読書学会『読書科学』2001.7）